

大学生における性格と 表情認知の関連について

0807010

樋口 花美

【目的】

私たちが、日常生活を送る上で欠かせないものの一つとして、他者とのコミュニケーションが挙げられる。このコミュニケーションは、言語的コミュニケーションと、非言語的コミュニケーションに分けることができる。Mehrabian (1986)によれば、感情の表出は、言葉による感情表現(7%) + 声による感情表現(38%) + 顔による感情表現(55%)の割合で構成されており、表情による感情の表現は、メッセージ全体に大きな影響を与えている。これまでの先行研究から、非言語的コミュニケーションにおける表出能力や認知能力には個人差があることが明らかにされている。

また、EkmanとFriesen(1987)によれば、基本感情として幸福、悲しみ、驚き、恐怖、怒り、嫌悪の6つの感情があるとしている。

番場(2006)は、認知者の性格特性と表情認知の関連について検討している。Big Five尺度から得られた性格特性の高低と曖昧な中間表情を用い、性格特性による中間表情の認知の仕方に違いが見られるかについて検討した結果、いくつかの表情において性格特性による違いが見られている。

しかし、番場(2006)の研究では、表情認知までにかかる時間が被験者ごとに異なる。また、FACSに基づき表出された表情をもとに中間表情が作成されている。したがって、本研究では、表情の呈示時間を統制し、FACSに基づいていない表情を刺激として用いても、先行研究と同様に認知者の性格特性によって曖昧な中間表情の認知に偏りが見られるかについて検討する。

【方法】

被験者は、北星学園大学の学生43名であった(男性11名・女性32名、年齢18-23歳、平均年齢20.05歳)。はじめに、Big Five尺度

に回答させ、各被験者の性格特性を明らかにした。実験では、被験者に曖昧な中間表情を1秒間呈示し、その表情が6つの感情(喜び、悲しみ、驚き、恐怖、怒り、嫌悪)のうちどの感情を表していると感じたかについて評定させた。

【結果と考察】

Big Five尺度から得られた各性格特性において被験者を高群・低群に分け、呈示された曖昧な中間表情に対する感情語の選択(表情の評定)に偏りが見られるかについて検討するために χ^2 検定を行なった。その結果、誠実性の高低において「喜び-怒り」の中間表情に対し、人数の偏りが見られた($\chi^2(4)=10.260, p<.05$)。誠実性高群は「嫌悪」を期待値よりも有意に多く、「怒り」を有意に少なく選択した。また、誠実性低群は、期待値よりも有意に多く「怒り」を選択し、有意に少なく「嫌悪」を選択した。また、正準判別分析の結果、「驚き-恐怖」の中間表情では、調和性が高いほど「悲しみ」や「恐怖」と評定し、調和性が低く誠実性が高いほど、「驚き」や「嫌悪」と評定したことが明らかになった($p<.05$)。

χ^2 検定および正準判別分析において、一部に有意な結果が見られた。しかし、結果が見られた表情は少ないため、性格特性と曖昧な表情の認知の間に関連があると断定することはできなかった。明確な結果が得られなかった原因として、表情の呈示時間が統制されていた点、他の言語的・非言語的手がかりが一切与えられていなかった点が挙げられる。また、表情の認知に個人差を生じさせる要因には、社会的スキルなどの性格特性以外の要因が考えられる。したがって、呈示時間や個人差の要因などの様々な側面からの更なる検討が必要であると考えられる。

(指導教員 豊村 和真 教授)